

# つぎはぎの仕事着

—暮らしが仕立てたデザイン—

## 展示作品解説書

会期：令和3年1月9日(土)～3月21日(日)  
場所：愛荘町立歴史文化博物館 企画展示室

### はじめに

昔の人々は、日常の労働によって仕事着が傷んでも、捨てることなく補修をし、長く着用しました。着ることができなくなった着物は縫い目を解いて大切に保管しておき、衣服に接ぎ当てるために使用しました。時には数代に渡って着用され、物を大切にする心と共に次の世代へと受け継がれていきました。人々の日常とともにあった仕事着は、労働の痕跡が見えるものもあり、当時の衣生活を知る上で重要な資料として注目されています。また、補修しつぎはぎだらけとなった仕事着の色合いが偶然、パッチワークやビンテージジーンズのように

になり、その美しさから近年国内外で「BORO」として人気を博しています。

展覧会では湖東・湖北地域で発見された仕事着を中心に展示し、衣生活資料から見える労働生活を解説します。また、滋賀県立大学や現代のファッションブランド（ANTONINA、KUON、matohu、NIMAI NITAI）に協力をいただき、つぎはぎに着想を得て制作した作品を展示し、現代の視点から芸術品としての仕事着の美しさを紹介します。

日本人の勤勉さと物を大切にする心から生まれた、美しい仕事着のデザインをご鑑賞ください。

### 1 仕事着とは

労働の際に着用される伝統的な衣服を仕事着、または野良着と呼ぶ。

仕事着は農林漁業を行なう際に働く人の身体を保護するために着用された。

昔の人々は一日の大半を仕事着で過ごしたため、仕事着には快適性と利便性が求められ、労働や住環境の特徴が良く現れる。例えば、山での防寒のために

厚手に作られているものや、漁師が使用する水を通しにくい木の繊維で作られたもの、作業のしやすさに特化した袖無しのものなどがある。こうした資料の特性から、仕事着は日本人の日常生活の実相を探るための重要な資料として着目されている。

滋賀県では琵琶湖における漁業やその周辺に広がる平野部での農業、山間部での林業と多様な労働の営みがあるが、県内での地域による仕事着の違いはさほど見られないとされる。



(写真1) 短上衣／愛荘町／当館蔵

愛荘町目加田の農家から発見された仕事着。模様のある布を対称に配置していることや、えり部分に模様が入った布を使っていることなどから、家族に少しでも良いものを着てほしいという制作者の気遣いが見える。

## 2 労働の記憶が残る仕事着

継ぎ当てのされた仕事着は各地で報告されており、当時の衣生活を知る事ができる貴重な資料として注目されている。しかし、激しく傷んだ仕事着は、調査を行なう以前に持ち主によって捨てられてしまうことが多い。また、仕事着はプライベートな場での衣服であることや、労働の辛い思い出が蘇るからといった理由で、持ち主が調査を断るといった例もある。

本展覧会の展示資料も、汚れや傷みが見えるものが大半を占める。しかしこういった使用痕から、仕事着がどのような作業に用いられていたかを推察することができるため、重要な資料となる。



(写真3) 長着／多賀町山間部／個人蔵

下部の擦れ跡から、座りながら膝の上で仕事をした時にできたものと推察できる。



(写真2) 長着／多賀町山間部／個人蔵

多賀町山間部で仕事着が採集された際に多量の衣服とともに発見された。発見時の状況から、昭和初期頃の写真と推定。仕事着を作っていた最後の世代か。



(写真4) 短上衣（背面）／東近江市南花沢／個人蔵

袖の形状や短上衣であることから山仕事で使用されていたと推測される。また、肩から背中にかけて擦れた跡があり、オウコなどの道具を背負って仕事をしていたことが伺える。

### コラム

#### 産着とぼろ布の信仰

現代では産着というと、子どもの宮参りの際に着せる華やかな衣装を指すことが多いが、出生直後の新生児に着せるものも産着という。

出生直後の子に一人前の手の通る着物を着せてはならないという習俗があり、昔はぼろ布や母親の腰巻など、古い布で新生児をくるんだという。県外では生まれたばかりの子どもの魔物に連れ去られるため、大人の着古した衣服

を着せるという伝承の残る地域もあり、出生直後の不安定な赤子の靈魂を大人の着物で守るという信仰が伺える。

また、子どもが産まれると、近隣の長寿の人や元気に育った子どもの古着を継ぎ合せて産着を作るという地域もある。健康な人の着ていたものには健康な魂が宿り、それにあやかりたいという信仰であろう。

布には着ていた人の記憶が宿っていると解説したが、使用痕だけでなく、このような伝承・習俗からも、日本人の衣服に対する想いが見えてくる。

### 3 長着・短上衣

裾の長いものは長着と呼ばれ、とくに多賀町では、山仕事の服を「山行きボッコ」と呼んだという。これらの衣服は主に室内での作業着としてや、女性の農作業着として着用された。肌着としてジュバンを着て、その上から長着を着た。下にはモモヒキなどの下衣を着用する事もあったという。また、男性は気温や作業によっては長着の裾を腰帯に挟んで「しりからげ」にすることもあった。

いわゆるハンテンの形状のものは屋外での作業がしやすいよう、身丈を短く作っている。上下二部式でモモヒキやパッチを履いて作業をした。

袖は作業によって形状を工夫してある。展示品の中には袖口を細くした筒袖や、作業で動かしやすいよう、たもとを折って縫いつけた巻き袖（もじり袖）と呼ばれるものが見られる。

昭和初期頃までは長着に前掛け姿で作業をする女性が見られたという。以後は筒袖の上衣にモンペやパッチといった上下二部式の格好が一般的になった。男性の衣服は大正末期から昭和初期にかけて西洋化がはじまり、ハンテンなどの短上衣に変わってシャツが着用されるようになる。



(写真5) 上衣／多賀町山間部／個人蔵



(写真6) 短上衣／多賀町山間部／個人蔵



(写真7) 上衣／多賀町山間部／個人蔵

全体に直線の縫い目が施されている。これは「刺子」と呼ばれる技法で、布を重ねて刺し縫いをする事で衣服を丈夫にするものである。

県外では刺子で模様を描き、装飾性を高めたものや、呪術的な文様を施し作業の安全を祈るものもある。

本展示会の展示品では刺子による模様はほぼ見られず、密に縫っているが多いことから、作業着としての実用性が第一に考えられていたことが分かる。

#### 4 モモヒキ・モンペ・パッチ

モモヒキは主に男性が上着の下に履いた。腰部分にある二本の紐を後ろで結んで固定する。接ぎ当てによって分厚くなったモモヒキは特に山仕事で重宝され、防寒性に優れるほか、飛び出した枝や粗い木肌などから肌を守った。展示品には内股が破れたものも多い。山間部の民家で採集された仕事着であることから、山仕事の中で木に跨った作業が推察できる。

女性の服装は前述の通り、明治から昭和初期までは長着姿に前掛けといった仕事姿が一般的であったが、昭和17年(1942)には厚生省生活局より「婦人標準服」が発表、「活動型」の衣服として筒袖の上衣にモンペ姿が推奨され、モンペが徐々に浸透していく。当時このようなズボン型の下衣を女性が着用すること

に抵抗がある人もいたようで、この格好を恥じる女性もいたという。ただ、機能性と防寒性が優れていたため、人目のない山でモンペを履いて、帰るときは人に見られないよう脱いで里に下りた、という話が残る地域もある。

モンペは前の紐を後ろでしっかりと結び、さらに後ろの紐を前で結んで固定する。排泄の際に簡単に着脱できるよう、後ろを固定する紐は短く带状になっている。昭和初期には腰や足首部分にゴムを使ったモンペも登場する。この頃から衣類が洋服化していくが、従来の下衣は長く着用されていた。戦後になると男性は下衣がズボンに変わっていった。

(写真8) 股引/多賀町山間部/個人蔵

山間部の住宅から採集された股引。破れた部分が層のようになり、何重にも補強されていることが分かる。山仕事の中で、木に跨る動作によって内股が擦れていったと推察される。



◀(写真9) 股引/東近江市南花沢/個人蔵

山行きの際に着用されたという。裂織の厚い布をしっかりと縫い合わせているにもかかわらず内股が破れており、過酷な使用が伺える。裂織は防寒性・耐水性に富み、分厚い布であるため、山仕事に適していた。



(写真10) モンペ/多賀町山間部/個人蔵 ▶

女性用の仕事着であるモンペ。足首部分にゴムが入っており昭和期のものと推察されるが、全体に細かく刺し子や接ぎ当てがあり、従来の仕事着と共存しながら服装が移り変わったことが分かる。

## 5 かけぬの 掛布

和服は反物から直線で切り出された布を縫い合わせて作っているため、糸を解くと元の反物に戻すことができる。この性質を利用し、補修や傷みが激しくなると、衣服の形状からばらして方形の布にして、一、二畳程度の大きさに縫い合わせて一枚の布に作り替えることがあった。

これらの継ぎ合せて作った布は家具などに掛けて物を保護したり、梱包するほか、農作業の際の敷物

として、収穫物の選定や軽作業をこの上で行なったといわれる。また、地域によってはこれを蒲団として使用する事もあり、中に綿を入れる場合でも綿の代わりにハギレの細かい布を入れて使うことがあった。また、この掛け布から再度、接ぎ当てに使うこともあった。

着物を掛布にしたり、掛布から仕事着を作ったりと、絶えず無駄なく布を利用することができるのである。



(写真 11) 掛布 (裏面)  
多賀町山間部 / 個人蔵

様々な小さい布が継ぎ合わされた部分と、元の黒色の着物が大きく使われている部分が見え、元の着物の形状が良く分かる。

(写真 12) 掛布 (裏面) / 採集地不明 / 個人蔵

刺繍の入った布やダメージジーンズのように擦れが見える布など、様々な布が継ぎ合わされていることが分かる。



## 6 布の一生

現代では安く衣服が手に入るため、古くなったり傷んだりした衣服は買い換えたほうが効率的である。しかし、その昔、布は貴重な資源であったため、反物から新品の衣服として生まれた布は、形を保てなくなるまで様々にリサイクルされた。

衣服が傷むと、当て布や刺し子をして補強される。穴が空いた場合は布を継ぎ当てて塞ぐ。傷んだ部位によっては縫い目を解き、着物を部位ごとに分けて他の衣服と組み替えて仕立て直し、別の衣服や蒲団にした。

仕事着や蒲団としての役目を終えた布や、小さいはぎれ布は継ぎ合せて雑巾として使用される。あるいは赤子のおしめなどに用いることもあった。また、細く割いて紐としても利用された。物を括るためや、草履の補強に編みこんで使用するほか、紺木綿を燃やしたときに出る煙や匂いには防虫効果があるといわれ、

丸めて火をつけてくすぶらせたものを農業の際の蚊よけとして利用した。

他には、細く裂いた布を横糸として織ることでサクリ（裂織）として新しい衣服に生まれ変わらせることもある。サクリは分厚く目が詰まっているため、保温性と耐久性に富み、気温の低い時期の作業や山仕事などで重宝された。

このようにして昔の人々は布一枚、糸の一本に至るまで無駄にすることなく使用してきたのである。ただ、必ずしも貧しかったからこのような利用をしていた、というわけではない。こういった利用方法は全国各地で報告されており、広く一般的におこなわれていたことがわかる。つまり貴重な布資源を最大限に活用しようという、日本人のものを大切にする文化のひとつであったのである。

(写真 13) はぎれ布・紐と行李／多賀町山間部／個人蔵

仕事着と共に発見された行李には沢山のはぎれや紐が保管されていた。中には縫い合わせている途中のものもある。このようなはぎれ布は「豆一粒を包めるほどの大きさであれば取っておく」といわれており、布を大切に扱っていたことが分かる。



(写真 14) サクリ／採集地不明／個人蔵

裂織は布が厚いため、防寒性・耐久性に優れており冬の雪山などで重宝された。穴のあいた場所からは元の布紐が見えておりリサイクルで作られたことが良く分かる。

BOROと聞いて頭に浮かぶのは、1982年10月にパリコレクションで川久保玲と山本耀司が発表した作品群である。これらは穴があいたり、つぎはぎされたりしていたため、「ボロルク」などと呼ばれ、当地で衝撃を持って迎えられた。川久保の「一般に上等な布地、いい服といわれるものとは価値観が違うのです」という説明に対し、フランスの「リベラシオン」紙は「つぎはぎにファッションと文化の確実な価値観を与えた<sup>(1)</sup>」と評した。また山本は、「一生に一着しか着ない服が生活していくうちにはぎ合され、日や雨に晒され、ほつれていく、無意識の美、自然の美しさを持つ服を作りたかったです<sup>(2)</sup>」と語った。こうした価値観や美意識が、現在のファッションデザイナーたちにも脈々と受け継がれていくことになる。

20世紀末には、グランジルクと呼ばれる不健康そうなファッションの流行の中で、ヒッピーファッションやボロルクを思い出させる服が見られた。古着を現代の感覚で甦らせる「リメイク」も脚光を浴びる。

21世紀になるとファッションの世界でも、資源の有効利用や廃棄処分の見直しなどの動きが生まれるが、それは世界の潮流と一致していた。2015年には、国連でSDGs(持続可能な開発目標)が定められている。

2005年設立のブランドmatohu(堀畑裕之、関口真希子)が、2014年秋冬コレクションで「日本の眼」シリーズ第9回として選んだテーマは、「ふきよせ」である。堀畑は、BOROや裂織、染織家の志村ふくみ(近江八幡生まれの人間国宝)が織りためた端切れで仕立てた「切継」の着物がもつ「無作為の美しさは、偶然寄せ集められた『ふきよせ』の美そのものだった<sup>(3)</sup>」と述べている。

2016年設立のKUON<sup>(4)</sup>(石橋真一郎)は、「久遠」に由来し、そのコンセプトは「新しいものは古くなるけれど美しいものはいつまでも美しい」というものだ。BOROの持つ歴史や背景、当時の人々の生活に思いを馳せつつ、そのアップサイクルを東日本大震災の被災地に発注するなどの挑戦をしている。2018年10月に、初コレクションを披露した。

2019年10月に東京で開催されたフィリピンの若手デザイナーの合同ショーの中で、ANTONINA(アントニーナ・アモンシヨ)は紺地に白糸で刺し子した作品を見せた。デザイナーはショーの後のインタビューで、日本のBOROが創造源であると答えた。

近江八幡市のブランドNIMAINITAI<sup>(5)</sup>(廣中桃子)は、2012年に設立。2016年にインドに事務所を構えた。最貧困州にあるブダガヤなどで、女性たちに裁縫を指導し雇用を生み出すなどの試みをしている。美しい手仕事の服づくりを目指すこのブランドの製品には、インドならではの刺し子やつぎはぎが活かされているが、そこには日本との共通点も見出される。

BOROそのものの人気については、2020年10月にNHKの番組でもイギリスの様子が紹介されたが、BOROは国内外で新しい服飾美を触発している。

【註】

- (1) 「リベラシオン」紙 1982年10月21日号(京都服飾文化研究財団『モードのジャポニスム』図録 1996年 p.155)
- (2) 「朝日新聞」紙 1982年11月22日号(同上)
- (3) 堀畑裕之『言葉の服 おしゃれと気づきの哲学』(トランスビュー 2019年) p.16
- (4) <https://www.kuon.tokyo/>
- (5) <https://nimai-nitai.jp/>



(写真15) matohu(堀畑裕之・関口真希子) 2014年冬/株式会社LEWIS 蔵



(写真16) カーディガン/ KUON(石橋真一郎)/2018年春夏 株式会社MOONSHOT 蔵



(写真17) ジャケット、スカート、人形 ANTONINA(アントニーナ・アバド・アモンシヨ) 2020年春夏/ANTONINA 蔵



(写真18) ブラウス、スカート、ストール、バッグ NIMAINITAI(廣中桃子)/2017年(バッグは2020年) 合同会社nimai-nitai 蔵

## ■ その他の列品作品



(写真 19) 長着／多賀町山間部／個人蔵



(写真 20) 上衣／多賀町山間部／個人蔵



(写真 21) 掛布／多賀町山間部／個人蔵

### 【参考文献】

- 恩賜財団母子愛育会編『日本産育習俗資料集成』第一法規出版 1975年  
神奈川大学日本常民文化研究所「神奈川大学日本常民文化研究所調査報告 第12集 仕事着—西日本編」平凡社 1987年  
中村たかを編『日本の労働着 —アチック・ミュージアム・コレクション—』源流社 1988年  
近江文化財研究所編・発行『産着考』1990年  
福井貞子『ものと人間の文化史 野良着』法政大学出版 2000年  
朝岡康二『ものと人間の文化史 古着』法政大学出版 2003年  
高橋晴子『年表 近代日本の身装文化』三元社 2007年  
小出由紀子・都築響一編『BORO つぎ、はぎ、いかす。青森のほろ布文化』アスペクト 2009年  
横田尚美『婦人標準服の変容 —婦人雑誌と服飾雑誌を資料として—』『社会文化史学 第60号』社会文化史学会 2017年

- ・本解説書は、令和3年(2021)1月9日から3月21日を会期として愛荘町立歴史文化博物館で開催する、第33回企画展「つぎはぎの仕事着—暮らしが仕立てたデザイン—」の展示概要と主な出品作品を掲載したものである。
- ・本解説書の編集及び1～6、8頁の執筆を愛荘町立歴史文化博物館学芸員・西連寺が行い、7頁は滋賀県立大学准教授・横田尚美氏に執筆いただいた。
- ・掲載写真は辻村耕司氏(辻村写真事務所)が撮影し、7頁の写真についてはANTONINA、KUON、matohu、NIMAI NITAIから提供を受けた。
- ・本展開催にあたり、展示資料を出陳いただいた所蔵者のほか、次の機関の協力を得た。記して謝意を表します(敬称略・順序不同)。  
滋賀県立大学 ANTONINA KUON(株式会社 MOONSHOT) matohu(株式会社 LEWS 纏) NIMAI NITAI(合同会社 nimai-nitai)

第33回企画展

## つぎはぎの仕事着

—暮らしが仕立てたデザイン—

展示作品解説書

- 【編集】西連寺匠(愛荘町立歴史文化博物館)  
【発行】愛荘町立歴史文化博物館  
【電話】0749(37)4500  
【発行日】令和3年(2021)1月9日  
©愛荘町立歴史文化博物館